

特集

純真学の概要と目的

濱田 維子

前純真学専門部会長

Overview of JUNSHINGAKU and objective

Yukiko HAMADA

Director of the department of JUNSHINGAKU

【要旨】 2016年4月のカリキュラム改正とともに、本学独自の自校教育・人間教育を目的として「純真学」が設置された。純真学科目は、「純真学入門」「社会人セミナー」「コミュニケーション論」「ボランティアとキャリア形成」「異文化交流」「総合純真学」の計6科目より構成され、入学直後の1年次から3年次で開講している。2018年で純真学は完成年度を迎え、これまでの実績と評価を基に、求められる医療人の育成を再考する時期を迎えた。

本稿では、純真学のねらいと概要、授業評価をふまえた期待される教育効果について述べる。

1. 緒言

我が国の医学・医療は大きな変革期にある。超高齢化社会の到来により、患者が抱える病は慢性疾患中心型になり、複雑化・高度化した医療に加え、地域における介護や福祉までを含めた包括的なシステムの整備が進められている。それに伴い、医療を支える人材には、病の予防・治療という視点に加え、病と共存しつつ、質の高い人生を送ることとその支援が求められる。医療人の育成を担う大学の使命には、専門的知識・技術に偏ることなく、幅広い教養を持った感性豊かな人間性とともに、個々が望む生活や人生、価値観を理解し、人間中心の医療・支援を推進する深い認識を持った人材育成が掲げられているが、今後もより積極的に取り組むべき教育課題であることに変わりはない¹⁾。

また、私たちは、未曾有の災害や人工知能の台頭による労働市場の変化など、個人にとっても社会にとっても将来の予測が非常に困難な時代に直面している。特に2020年春から深刻化した新型コロナウイルス感染拡大は、誰も予測しえなかった世界規模の災害であり、現在に至るまで医療、経済、そして教育のあらゆる分野に大きな影を落としている。全国の学校は臨時休業に追い込まれ、現時点でも一部の大学を除き、遠隔授業あるいは面接授業と遠隔授業の併用で授業を実施している大学が8割を超えている²⁾。本学においても、危機に備えたオンラインでの授業配信やメディアを利用した授業への転換に苦慮しているが、一方で、安全と教育効果を天秤にかけるようなカリキュラムの審議は、オンライン授業でも効果的な授業と対面授業でしか得られない教育効果の洗い出しにつながっているように思う。未知のウイルスに対する情報を客観的・多面的に理解する情報リテラシーの育成や医療を支える厳しさと誇りを認識させるキャリア教育といった、より現実的な教育機会につなげることもできる。予測困難な時代を乗り越えるために、“正解を導き出す能力”を目指した教育から「生涯学び続け、どんな環境においても“答えのない問題に最善解を導くことができる能力”を目指した大学教育への転換」³⁾が謳われてきたが、今だからこそ、あらためて実現可能な教育に取り組む意義は大きい。

本学が2016年度4月に設置した「純真学」は、自校教育に加え、医療人としての志を持ち、生涯にわたり学習する意義とその手段を深く認識させる人間教育を目指した科目群である。決して学部教育で完成される教育ではないが、我々教職員が建学の精神に立ち戻り、専門知識や技術に偏らない人間性豊か

な人材を育てることを念頭に置いた際、学生に何を感じさせ、何を考えさせるべきかを真剣に審議し、様々な教育の切り口を模索し提案し続けてきた。本稿では、純真学の使命と概要について述べる。

2. 純真学の位置づけと運営

看護学科、放射線技術科学科、検査科学科、医療工学科の4学科を擁する本学保健医療学部では、各指定規則を踏まえつつ、人間教育、教養教育を重視した「純真学」を設置し、独自の共通カリキュラムによって、社会が期待する医療人の育成を試みている。純真学で育成したい能力は、①人の生き方や広く社会・文化に興味関心を持ち感性を磨く、②ボランティア活動を通して、人間関係形成や社会貢献ができる、③自らの目標と課題を見出し、主体的に行動できる、④建学の精神を通して医療人としての人格を形成する、の4つである。純真学は、本学の建学の精神である『気品』『知性』『奉仕』の精神を具現化する自校教育であるとともに、豊かな人間性や感性を兼ね備えた医療人の育成を目的とした教養教育プログラムである。学科の枠を超えて全学的に取り組む共通教育科目に区分される科目群で、「純真学入門」「社会人セミナー」「コミュニケーション論」「ボランティアとキャリア形成」「異文化交流」「総合純真学」の計6科目で構成され、1年次から3年次にかけて展開する(表1)。また、これら純真学科目に加え、非常勤講師によるオムニバス授業である「純真学園大学現代教養講座」を設置し、教養教育の更なる強化を図っている。

表1. 純真学科目(6科目)

科目名	主なねらい	開講	時間 (単位)	科目責任者
純真学入門	自校教育	1年前期 (必修)	15 (1)	学長
社会人セミナー	礼儀・マナー・文化	1年前期 (必修)	15 (1)	純真学専門部会長
ボランティアと キャリア形成	ボランティア活動 キャリア支援	2年通年 (選択)	15 (1)	就職部長
異文化交流	海外研修 異文化理解	2年通年 (選択)	15 (1)	国際交流委員長
コミュニケーション論	コミュニケーションスキル	1年後期 (必修)	15 (1)	講師
総合純真学	純真学統括	3年前期 (必修)	15 (1)	各学科長

大川は、2008年度全国大学における自校教育実施状況調査⁴⁾において、当時の自校教育の現状を明らかにしている。その中で、大学における自校教育の実施形態は、大学の歴史・沿革や教育の特色を紹介する1~2科目の講義科目が設置されている形態が最も多く3割以上を占め、続いて、初年次教育としてガイダンス的内容からキャリア教育など様々な内容が教授されている大学が2割近くを占めていた。いずれにしても、自校を語る担当者の確保が難しいこと、複数の講師によるオムニバス形式であるため全体の取りまとめが難しく、教育の質保証の観点で課題があることを指摘している。本学は、純真学専門部会を設置し、組織的に純真学科目群の企画・運営・評価が行われている。また、1つの科目群が、①大学理念・目的の周知と大学が立地する「地域」の理解による愛校心・帰属意識の涵養、②大学における学習目標の明確化と初年次教育、③奉仕活動や海外研修を通じたキャリア教育、④異なる医療職を目指す学生間の演習や文化体験を通じたコミュニケーション力の育成 という複数の教育を担う他大学に例のない自校教育の試みだと言える。また、「ボランティアとキャリア形成」、「異文化交流」の2科目は選択科目だが、他4科目は全学科必須科目であり、大学が純真学を重視していることは学生に伝えられている。

純真学専門部会は、任命を受けた部長と各学科1名、合計5名の専任教員と大学教務により構成される。

科目責任者は各科目のねらいに即した役職者とし、各科目の授業運営から評価までの責任を担う。純真学専門部会は、科目責任者と連携し、純真学科目全体を俯瞰的に見ながら、実際の授業運営、提案、関係者間のコーディネート、教育効果の評価を担う。評価については、科目運営に携わった部会員および学生による授業評価結果を参考に整理し、科目責任者と情報共有するとともに、次年度の授業展開を提案し新たな企画に取り組むという、PDCA サイクルに沿った運営を行っている。

また、各科目で使用した教材やレポートは、ポートフォリオ形式で学生自身が管理・活用できるよう、「純真学ファイル」を配布している。講義やボランティア活動等の貴重な体験を自らの言葉で学びとして残し、就職活動等にも活かしている。



純真学ファイル

3. 純真学科目とその概要

純真学科目は、各科目のねらいと内容に応じて段階的に開講される(図1)。入学後間もない1年次では、「純真学入門」で、『気品』『知性』『奉仕』という建学の精神とそこに込められた学園創設者の思いに触れる。2年次には、「社会人セミナー」「コミュニケーション論」「ボランティアとキャリア形成」「異文化交流」を通して、建学の精神の意義を各講義や演習、体験から学ぶことになる。演習を主としたこの4科目は、地域貢献や他者との信頼関係、多様な文化の理解を通して、建学の精神で示された3つの概念を学べるよう授業展開・評価を実施している。3年次に開講する「総合純真学」では、一流とされる人物とその功績、活動に触れる。純真学科目の総括となるこの科目を通して、医療人としてのプロ意識を再考し、建学の精神に対する個々の学生の思いと卒業時、卒業後に目指す自分像を描かせている。

3.1 純真学入門

本科目のねらいは、入学直後に、純真学園の歩みや創設者の生涯と事績、建学の精神によって象徴される人物像を知り、志とは何か、学生個々が自分の将来を見据えて4年間の大学生活の目標を考えるこ

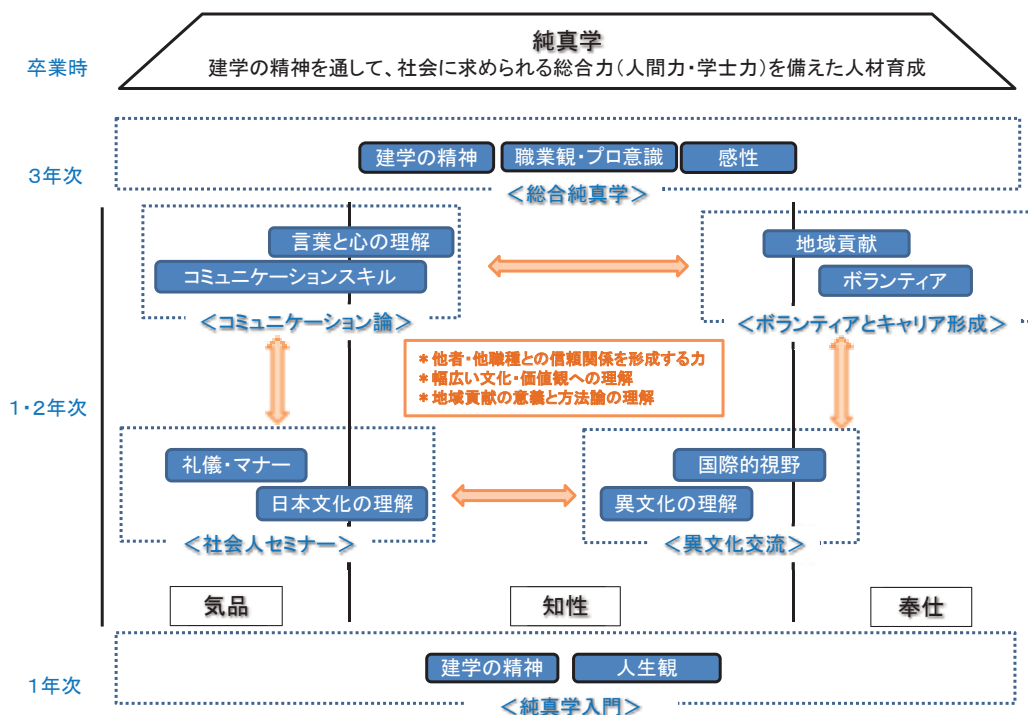


図1. 純真学

とである。

授業は、本学園創設者であり医師であり国会議員である福田昌子女史の教育への思いや事績に触れること、さらに、『気品』『知性』『奉仕』という建学の精神が、福田庸之助学長に引き継がれ、現代社会に求められる人材とどのように関わるのか、学長の価値観に触れ、考えるところからスタートする。その後の授業展開はオムニバス形式で、国境を越えた地域貢献や教養の重要性を実感させるべく、多様な分野で活躍する専門家や医療現場で活躍する卒業生による講演で構成している。これまでの講師には、海外での研究活動と研究実績を豊富に持つ医療専門職、保育の現場で人間教育に携わる保育園園長、長年、現場で校長・書道家・研究者として活躍されている教育者、卒後2～3年目で活躍する卒業生等を招いた授業を展開してきた。専門もキャリアも異なる各講師の実体験や事例を踏まえた授業では、経験や人との出会いを自らの成長につなげ、学習し続ける好奇心と使命感、エネルギーが伝わってくる。入学生にとって、この先、自分にはどのような可能性や選択肢があるのかという広い意味でのキャリア教育にもつながっている。

受講者には、興味を持った分野や講師から学んだ事柄についてまとめさせ、小人数によるグループワークと代表者による全体発表を実施している。300名以上の学生を対象とした授業となるため、クラスを分けた少人数演習と学びを共有する機会を組み込むことによって、主体的学修の促進と学生参加型の授業を試みている。

授業評価結果では、毎年80～90%の学生が「純真学園について知ることができた」、「大学生としての目標を明らかにできた」、「プロ意識を持つことができた」と答えており、科目のねらいはほぼ達成している。自由記載には、「これから先どのような心構えで学修に取り組むかという気持ちを学ぶことができた」「将来の医療職の像をはっきりと描くことができた」「大学を知ることができ、これからの生活を有意義にしようと思った」という意見も見られた。高等教育から大学への円滑な移行を図り、大学での目標を設定するという初年次教育の一端も担っていることがわかった。



さらに、本学の入学生は、推薦入試を活用し比較的早い段階で入学を決意していた者、一般入試での第1希望が叶って入学した者、第1希望が叶わずに入学した者が混在しており、入学時のモチベーションには、個人的要因も加わり個人差があることは想定される。本学に入学したことを誇りに思えるよう導く自校教育は、多様な入学生を、一同にスタート地点に立たせることも可能にすると思われる。

3.2 社会人セミナー

本科目は、日本文化のおもてなしのこころや礼儀、日本人の機微に触れ、建学の精神である気品と知性への認識を深めることをねらいとしている。礼儀・マナーについては、日常生活に限らず、学外実習や就職活動に不可欠な事柄であり、初年次教育では、学生生活における時間管理や学習習慣の確立、受講態度に並び重視する内容に挙げられている。この科目では、単なるビジネスマナーを身につけるのではなく、日本文化の伝統や精神から礼儀・作法の意図や実際を理解するといった斬新な内容で構成している。

初年度は、各専門家による茶道と書道の集中講義を企画し、より多くの学生が体験できる演習を展開

した。茶道については、今まで経験したことのない学生が多く、本授業をきっかけに興味関心を持った学生が茶道サークルを設立し、その後は、先輩部員が本科目のティーチングアシスタントとして協力してくれるようになった。茶道・書道に限らず、俳句や短歌、落語を題材とした授業や、琵琶奏者による演奏と講話、近隣ホテルとのコラボ企画による日本の食文化と懐石料理のマナー講座など、毎年、様々な日本文化とテーマを検討し、企画している。

授業評価結果より、8割以上の学生は礼儀・作法や日本文化を知る意義を感じていたが、一斉に行う演習においては、準備と運営に時間と人員を要し、純真学専門部会と担当教員の負担が大きいことが課題である。



3.3 異文化交流

本科目のねらいは、海外研修を通して、国際的視野と異文化コミュニケーションの必要性を学ぶことである。他大学でも積極的に取り組まれているように、国内外の文化や社会に触れる経験は、他国・他地域・異文化の理解を促進し、国内外における地域貢献への意識向上が期待できる。また、本学が位置する福岡市は、アジアの玄関口として外国人居住者や観光客も多く、国際的に活躍できる能力を身につけた人材へのニーズは高い。現在、仁済大学校（韓国）、春海保健大学校（韓国）およびハワイ大学をはじめ、中国、ベトナム、オーストラリアにおける複数の大学との国際交流提携と大学ネットワークの構築に取り組んでいる。本授業は、大学の国際交流委員会にて担当し、医療の国際化と海外で働く意義についての講義（5月）、海外研修（9月）、研修報告会で構成されている。

授業評価結果では、履修者全員が「様々な文化や価値観を理解する意義を感じた」「国際的な視野を広げることができた」と自己評価しており、今後の目標や将来像にも影響を受けていた。毎年、履修希望者も増えており、学生同士の更なる交流を望む要望も寄せられている。研修日程や回数を増やすことが望ましいが、引率教員の確保や研修期間の調整という課題も抱えている。

また、海外研修の充実とともに、2019年度より英語能力の強化を図るため、日本医学英語検定4級取得コース開講と、学年単位での TOEIC 試験実施と点数の目標設定を開始し、英語力の可視化を試みている。医学英語検定4級取得コースは、医学・医療の現場で必要とされる実践的な英語力を身につける少人数クラスであり、e-learning と個別相談を活用した授業展開によって、学生の主体的学修を促す授業展開としている。英語力が向上した学生には本科目における海外研修や語学研修への優遇措置を検討するなど、カリキュラムレベルで英語能力の向上と異文化コミュニケーションの機会を提供することを検討している。

3.4 ボランティアとキャリア形成

本科目のねらいは、奉仕活動を通し、専門職として地域貢献を果たす意義と自身のキャリア形成について考えを深めることである。建学の精神には、『奉仕』について“多くの人に支えられていることに感謝し、利害損失を捨てた時に、心の底から生まれる志に準じて行動すること”と示されている。人の命を支える仕事を目指す学生にとって、奉仕活動を通して、他者への配慮や関係性を築くためのコミュ

ニケーションを学ぶことは貴重な体験である。当初、ボランティア活動を単位認定科目に位置付けることには賛否あったが、ボランティアの機会を提供する意義は非常に大きいと評価している。指定した14時間の奉仕活動をクリアするためには、長期の活動もしくは複数の活動に携わる必要があるため、奉仕の精神のみならず社会性も学んでいる。学生個々で選択する活動場所は、保育園や乳児院での環境整備からマラソン大会の運営補助、障がい児施設でのイベント補助など多岐にわたる。教員主催の地域貢献活動を紹介することも多く、大学の地域貢献の助力にもなっている。



開講当初は活動報告書の提出を持って単位認定を行っていたが、平成30年度より、評価のフィードバックと共に貴重な体験の共有を図るため、活動報告はポスターにて校内に掲示後、投票による優秀な活動の選抜を行い、最終授業での発表と表彰式を行っている。授業評価結果では、9割の受講者が社会貢献の意義を感じており、「なかなか自分から活動することはなかったので、良い経験ができた。」「自分の視野が広がる貴重な経験をした。これからも参加していきたい。」という意見があった。また、活動を通してコミュニケーション力を磨くことができたという者も9割を占め、奉仕活動が様々な組織や人との関わりで成立していることを学んでいる。医療・福祉施設での奉仕活動や学会ボランティアは医療専門職のキャリア教育にも役立っていた。福岡市ボランティアセンターとの連携も可能となり、今後より主体的な学生によるボランティア活動の活性化と大学の地域貢献を期待している。



3.5 コミュニケーション論

医療者間および医療者・患者間のコミュニケーションスキルを学修する機会については、各学科でその内容や方法が異なるが、本科目は、全学科1年生を対象にコミュニケーションの基礎的スキルを習得させることをねらいとしている。日本経団連が毎年実施している「新卒採用に関するアンケート調査」の結果で、選考にあたって特に重視する能力のトップに常に位置するのは、職種を問わずコミュニケーション能力である⁵⁾。企業が新卒に求めるコミュニケーション能力とは、相手側の述べたことを適切に理解する思考力やプレゼンテーション能力を指しており、長年、コミュニケーション能力の育成は大学教育の課題となっている。コミュニケーション能力は、「授業の中でディスカッションの機会を多く持ち、教員や他の学生の意見を聞くことや自身の意見を述べること」や「授業でのレポート作成課題などを通じて、様々な文献を調べることや情報を集めること、そしてそれらを発表し、問題点などを指摘されるという経験」によって、高まる可能性が指摘されている⁶⁾。本授業では、5~6名で構成する小グループでの新聞記事を活用したグループワークで、情報リテラシーの育成とともにディスカッションの反復演習



が行われる。学科を超えた合同演習は、適度な緊張感の中での意見交換を可能にし、「自分のコミュニケーションの傾向を分析できた」、「目指す職業に必要なコミュニケーション力について述べることができた」とする学生が8割を超える授業評価につながっている。特に医療職におけるコミュニケーション能力は、職種を超えて獲得すべき能力だが、苦手意識を持つ学生も多い。授業で実施される自己分析は、初年次教育の一環でもあり、2・3年次に開講する臨地実習に向けた学生個々の課題の明確化にも役立っている。

3.6 総合純真学

建学の精神を学び、大学生活の目標と志を考える「純真学入門」から始まった一連の純真学科目の受講を終えた3年次に開講する本科目では、一流に触れることができる文化施設の訪問を通して、多様な価値観と感性を養い、医療人に共通するプロ意識について学ぶ。また、学んだ建学の精神に立ち戻り、『気品』、『知性』、『奉仕』が意図することは何か、自分の言葉で置き換えて志を新たにしている純真学の統括となる科目である。

すべての純真学科目の企画・運営・評価を取りまとめてきた純真学専門部会にて、どのような一流の技や人物を設定すれば学生が何を感じてくれるか等、様々な可能性を夫々の価値観を持つ教員間で審議し企画した。2018年度から取り組んでいるテーマは“歌舞伎”であり、「日本芸能の歴史と歌舞伎」、「博多座の歴史と歌舞伎の見かた」について、博多座責任者による事前講演を企画し、博多座での公演を鑑賞した。その後、“一流とは何か”についてのグループディスカッション、発表に至る演習を展開した。ほぼ全員の学生が歌舞伎鑑賞は初体験であり、役者が百年以上前から引き継いできた日本芸能に触れ、舞台を作り上げる大勢のスタッフの存在と役割を知って感動を覚えていた。さらに、役者と裏方の鮮やかな連携プレーによって1つの舞台を成功させる様に、チーム医療を連想した学生も見受けられた。“一流とは何か”という問いは、学生のみならず、企画・運営する専門部会の教員にも投げかけられた。様々な分野で感動を与えている一流と認められる人は、自分に与えられた力を最大限に発揮する努力を惜しまない生き方をしている人であり、人の協力なしでは成し遂げられないという謙虚さと感謝の念を持っている人であろう。「純真学入門」と「純真学園大学現代教養講座」では、医療、福祉、経済、文化、行政といった様々な分野で活躍している講師を毎年10名程度招聘しているが、受講生は、その都度、一流の人物の考えや生き様に触れる体験を重ねている。これらの授業も、「総合純真学」での体験と一流への解につながっていることと思う。

純真学で目指す人間力の教育評価は容易ではないが、人間力とは何か、人間力を身につけるために卒業後も必要とされる学びや志は何かを、各自で自覚することに大きな意義があると考えている。

4. まとめ

カリキュラム改正に伴い、多職種連携教育と共に本学独自のカリキュラムとして「純真学」が加わった2016年4月、純真学専門部会長に就任し、それからの3年間は、科目運営に奔走している間に過ぎていったように感じる。純真学専門部会は、純真学科目に「純真学園現代教養講座」を加えた7科目の企画・運営・評価を一任され、設定されていた各科目のねらいを何度も反芻しながら、部会員の先生方と授業案の審議や準備、外部講師や訪問施設の提案、多くの教職員への協力依頼と説明会を月に何度も開催していたように思う。1学年300人を対象とした効果的な授業展開を目指すには、様々な課題に直面したが、運営に取り組む中で、純真学のねらいがこれからの医療に求められる人材育成にいかんに沿ったものであるか、さらに自校教育と初年次教育、そしてキャリア教育が融合した他大学には類を見ない教育プログラムとなりうることに気づき、純真学を本学独自のカリキュラムとして確立することに微力ながら最善を尽くした。部会では、もっと学生の学びを深めるにはどんなテーマや方法があるか、毎回検討しては新たな提案を試みる日々が続いた。教育・研究活動に携わりながら部会業務を抱えていた当時の

部会員の先生方は大変だったと思うが、毎回斬新な提案や意見が飛び交う会議は楽しかった。さらに企画や提案にご理解とご助言をいただいた福田学長と加藤亮二前副学長には心から感謝を申し上げたい。純真学を通して、私自身も受講者とともに愛校心を高め、様々な分野で活躍する講師の先生方と出会い、志を見つめ直す体験ができたように思う。教養教育、人間教育に完結はない。各純真学科目も進化し続けてきた。純真学完成年度を迎えた今後は、客観評価とともに独自の教育プログラムの確立を目指して、更なる進化を遂げることを期待している。

参考・引用文献

- 1) 文部科学省. 21世紀医学・医療懇談会第1次報告, 21世紀における医療人育成の考え方, 平成8年12月.
<https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/009/toushin/961201f.htm>
- 2) 文部科学省. 新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況 令和2年7月1日時点.
<https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf>
- 3) 文部科学省. 平成24年中央教育審議大学分科会. 予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ
<https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/04/02/1319185_1.pdf>
- 4) 大川一毅. 自校教育の現状と課題, 日本私立大学連盟「大学時報」. 58 (328), 48-55, 2009.
- 5) 一般社団法人日本経済団体連合. 2018年度新卒採用に関するアンケート調査結果.
<<https://www.keidanren.or.jp/policy/2018/110.pdf>>
- 6) 廣岡秀一・横矢規・中西良文. 大学生のクリティカルシンキング志向性と大学生生活経験. 三重大学教育学部研究紀要, 132-133, 2006.